

## 福田地区防災士会第17回研修会(屋代島研修)報告

11月19日(日)、13名の参加者で山口県の屋代島で研修会を開催しました。防災士11名に加えて安永連合町内会長さんと五月ヶ丘自治会長の原さんも参加されました。屋代島の外入(とのにゅう)の郷地区には、高さ16mまで津波がせり上がってきた(遡上)という伝承碑があり、その様子を見学し、広島での津波襲来時の避難に活かすことを目的に実施しました。

現在、広島市で想定されている南海トラフ巨大地震による津波の高さは3.6mですが、これまで実際に瀬戸内海でどのような津波が起きたかということはありません。福田地区では津波の心配こそありませんが、市内へ出ている時や旅先でこうした地震・津波に遭遇する可能性は十分にあります。そうした意味で、この研修は非常に意義のあるものでした。

まず最初に屋代島に渡る橋の上から、資料に基づいて、1361年の正平地震の際に起きたという急激な海面低下(津波の引き波と考えられる)によって海面下の姿が現れたとの民話が伝わる岩礁とそこに立つ灯台を遠望。続いて椋野地区の川では、1854年の安政南海地震の際、河口から900mも津波が遡り、標高23.5mの高さの石垣にタコが張り付いていたという伝承記録を資料で確認し、川や周辺の地形などを車上から見学しました。北に向かって開いた湾の奥に津波が集中したと考えられます。

屋代島の北西部の久賀(くか)では、地震と津波に特化した防災センターとしては山口県唯一の施設といわれる大島防災センターを訪問。ここでは、センターの職員の方から映像とお話、館内に置かれている避難所の初動対応用の備蓄品(段ボールベッドや簡易トイレなど)の紹介がありました。画像検索のモニターには福田地区の土砂災害ハザードマップが用意されていて、対応の熱意に一同感動した次第です。

午後は屋代島南側の外入郷地区で1854年のできごとを伝える安政南海地震津波到達碑を見学しました。ここは海岸から約350m離れた標高16mの高さのところにある畑(当時は水田)まで津波が小川を遡上したという伝承が残っていたところです。地元の木村庄吉さんから、水田を造った時に出土石ころなどを積み上げた小山に置いてある祠の下の畑(当時は水田)まで、津波が小川を遡上したという伝承を木村さんの祖父が子供の頃にその祖父から聞いた話として説明してくださいました。

また、こうした伝承を地元の小学校に勤められていた際にまとめられた濱村一男先生からは、この伝承の内容が最も信頼度が高いことや国土地理院によりこの津波到達碑を地理院地図に記載されるようになったこと、この碑が木製で金属の銘板を打ち付けているのは、何年か経ってこの碑が朽ちた時にまた碑を新しくしていくことで、伝承がよりしっかりと伝わりやすいと考えてのことなど、さまざまな工夫や苦勞があることもお話してくださいました。ただこうした伝承が「一人歩き」をすることで、一部の心無い見学者などによる迷惑行為などが出ていて、伝承記録の保存や普及には多くの課題があることもわかりました。マナーを守った節度ある見学が必要です。

津波到達碑からの帰路、途中の小山の上にある山田神社を訪問しました。ここは海岸か





上記地図の⑦地点の島(白い灯台がある)



23.5mの遡上高の伝承がある椋野地区



大島防災センターで職員の方から避難所用品の説明を受ける。非常用トイレに水を入れて凝固剤の実演。



大島防災センターの玄関で(右端はセンター職員の中村氏 撮影:播野防災士)



外入の海岸にて

説明する地元の木村さん(左端)

木村さんの案内で津波到達碑へ

津波はこの海岸(当時防波堤はなかった)に達し、写真右の道の左にある小川を遡上したとされる。



中央左に安政南海地震津波到達碑の頂部が見える。津波はこの道路の向かって右側にある小川を遡上し、到達碑の下側の水田(写真右の畑)まで来たと伝承されており、参加者で海を見ながら確認。



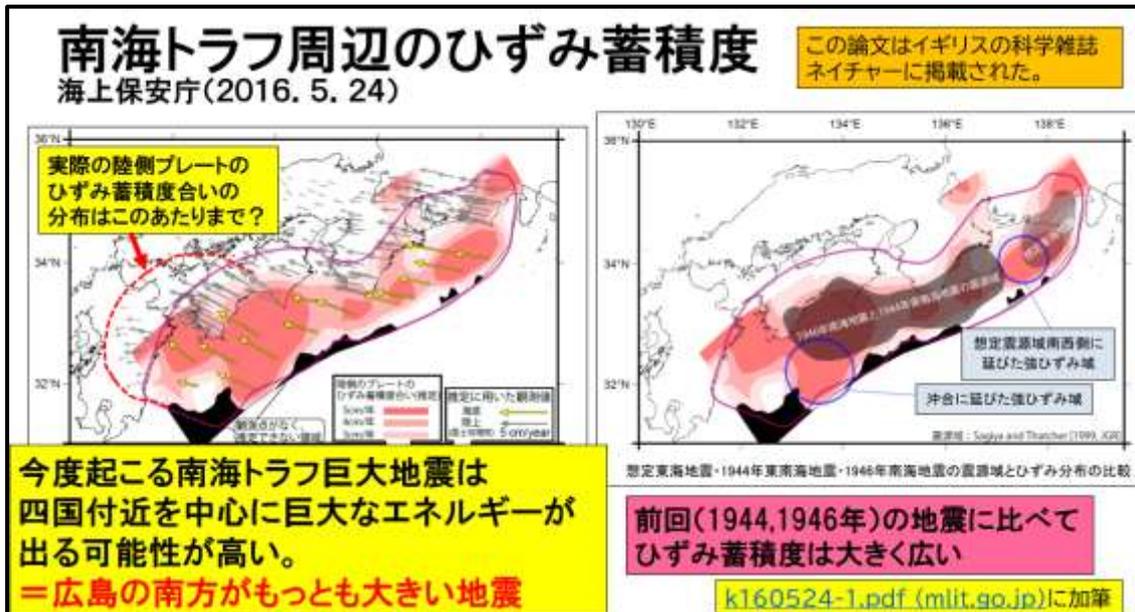
碑の入り口にある説明板。



津波到達碑について参加者に説明される濱村先生



参加者一同で記念撮影 後列中央が濱村先生、右端が木村さん。



城山小学校

ぼうさい かぞえ唄(いのこ唄)

ひとつ ひとよに つたえたい  
ふたつ ふるさと ふるえる日  
さんてんいちいち おもい出せ  
よつつ よこゆれ 長いとき  
いつつ いっとき みをかくせ  
むつつ むかえ たかいとこ  
なーみは4ばい さかのぼる  
やつつ やめとこ ひきかえし  
ここのつこの身も てんでんこ  
とーどけ この声 瀬戸内海  
ひーびけ この唄 西日本  
ようじんせえ ようじんせえ  
はんじょうせえ はんじょうせえ  
はんじょうせえ はんじょうせえ！

濱村先生作詞の「ぼうさいかぞえ唄」

地元に伝わる「いのこ唄」をもとに、地震が起きた時に何に気をつけ、何をすべきかが、生活感覚で盛り込まれている。島の子どもはもちろん大人たちにもなじみの唄であり、生活感覚での警鐘の唄といえる。